

何もしない悪役令息になつてみた

ルデウス

ゲーム主人公である男爵令息。
美しいが腹黒いぶりっ子。
攻略対象達を
狙っているようで……

オルクス

皇帝の次男。
リアムに一目惚れし、
婚約を申し入れてきた。
優秀な美形なのだが、リアムに
関してはボンコツ気味。

アムール

リアム達の祖母(男性)。
帝国の出身で、数々の
伝説を持つ美人。

シリル

リアムの侍従。
主人のことを大切に思っており、
オルクスの挙動に
目を光らせている。

リアム

サファイア公爵家の三男。
ゲーム世界の悪役令息だが、
日本人だった前世の記憶を持つ。
ゲーム設定とは異なり全盲の
穏やかな愛され美少年。

オステオン

オルクスの兄で
飄々とした皇太子。
弟の恋を応援しつつも
その暴走を止める係。

エドワード

リアムの兄で公爵家の次男。
本来のゲームでは
騎士であり攻略対象だったが、
今は弟大好きな
いいお兄ちゃん。

Characters

プロローグ

彼の冷たい掌が私の頬を撫でる。

私を抱きかかえたまま、彼はソファに座り、今日はいつも以上に優しく頬を撫でる。まるで壊れ物を扱うかのような手付きだ。

彼は多分、最高に良い笑顔をしているのだろう。

何も見えない私は、彼の表情はおろか、顔すらわからない。

でも、彼の色を私は知っている。

淡い銀色の髪。

太陽の下では時々虹色にも見えると教えてもらった時、実際には見られないことが私は悔しかった。

薄紅の海棠色の瞳。

優雅、上品をイメージさせる色。

皇子である彼に、ピッタリと当て嵌まる色だと思う。

私自身、今どんな表情をしているか、わからない。けれども、幸せな顔をしているのは確かだろう。

何故なら、彼と同じ時間を過ごせるのだから。

私の頬を撫でている手が止まり、彼の親指だろう指が私の下唇をふにふにと軽く押す。

「ここに口付けをしても、いいかい？」

彼は少し熱の籠もった言い方をしてきた。

「……口付けとは、何でしょう？」

意味を知っているけど、私は知らないふりをする。

彼は【性】に対して無知な私が好みだから。それに誰も教えていないと思っている。

彼は私を一から十まで全てを自分好みに育てたいのだと知っているの、彼の前では【性】には無知なふりをする。

「口付けとは、君の唇と私の唇を合わせることだよ」

「それは、……何の意味があるのでしょうか？」

意味は知っているけど、彼からの言葉が欲しかった。

「ふふつ、意味か。君は面白い質問をするね。……でも、そうだね、私は君を愛している。愛しているからこそ、私は君の唇を奪いたい。そして、君の身体も心も全てを私のものにしたいんだ」

「……愛しているから、身体が欲しいのですか？ 私は食べられてしまって、貴方の血肉となるんでしょうか？」

私はキョトンとした顔で、『頭からバリバリと食べられてしまうのか？』と聞いてみる。

「ふふつ、本当に君は面白いね。君を食べて、君がいなくなってしまうのは嫌だな。……そうだね、

私との結婚式が無事に終わったら、その意味をきちんと教えてあげよう」

「貴方と結婚するまでは、その意味は教えてくれないのですか？」

「今すぐにも教えてあげたいところだけれど、君の家族に叱られてしまいそうだ」

「叱られることなのですか？」

私の家族も彼の一族も、婚前交渉はもつてのほかだ。不貞扱いにされても仕方がない。それに、今の私にはまだその覚悟はできていないので、彼には我慢してほしい。

「ふふつ、結婚前だからね。結婚した後のお楽しみだよ。……ところで、口付けはしてもいいかい？」

「……口付けする意味が『愛している』という意味なら、私も貴方を愛しているので、……しても構いません」

『愛している』なんてあまり口にしない言葉だから、私は照れて、許可の言葉はちよつと冷たい言い方になってしまった。

「んんつ、本当に、君のそういうところが愛しいよ」

『そういうところって？』と聞き返そうとしたが、すぐに彼の唇が合わさってきた。

私より厚めの唇。少し乾燥していてかさつく唇が、角度を変えるたびにしつとりと濡れていく。私にとつての初めてのキスで、彼は優しく唇を合わせてくれる。彼の唇は、彼の掌と違って熱く感じられる。

しかし、彼からのキスは長かった。途中息苦しくなり、彼の胸を拳で叩いた。

鍛えてもいない私の拳は、鍛え上げている彼にとつては子供の拳よりも軽いのかもしれない。それでも私は苦しさで抵抗をする。

彼が満足しようやく離してくれた時には、私は酸欠状態でぜいぜいと肩で呼吸をした。初めてのキスが、全力疾走後と同じくらい苦しいものとは！

「はあはあ、口付けとは苦しいものですね。はあ、本当に愛し合う人同士でするものなんですか!？」

「ふふっ、口付けの時は、鼻で呼吸するものなんだよ。ごめんね、最初に教えておけば良かったよ」彼は多分意地悪な顔をしているだろう。

私の頬をまた撫でながら、親指で唇をフニフニといじってくる。

彼は昔から誰かに何かを仕掛ける時は、一から五くらいまでしか説明をしない。六から十は、実際にやってみないとわからないやり方で、どう行動しても彼の掌で転がるようになっていると、彼の兄から教えてもらった。『兄の扱いが酷い』と、私に嘆きながら愚痴^{ぐち}っていた。

出会った時から彼は私に優しく、そんな意地悪をされたことはない。

けれど一回だけ、彼の罠に見事に嵌^{はま}ってしまった。

その結果、私と彼は婚約することになった。思い返しても、してやられた感が強くて、思い出し怒りをしてしまう。普通に私の返事を待っていても良かったのに、って。

彼は、私が口付けの意味を知っているとわかっている、こんなに長くしたんだろう。彼は大人になっても根っこの部分は変わっていないようだ。

「こんな苦しいことなら、私はもう貴方と口付けをしたくはありません」

少し怒ったように、ふんと頬を膨らませて、そっぽを向いて私は言う。初心者相手なんだから軽くすると思っていたが、あんなに長く、しかも何度も角度を変えて離してくれなかった。

もうやめると合図したのに、彼が軽く流したことに怒ってしまう。

「怒ったのかい？ すまないね。君が相手だと、私はどうも箍^{たぶ}が外れてしまうようだ」多分ニヤニヤと笑いながら言っている声だった。

「私は、貴方みたいに口付けに慣れていないんです。優しくしてくれないのなら、もうしたくないです」

「おや、まるで私が遊び人かのような言い方をするねえ」

彼は心外とばかりに言う。

「違うんですか？ 私と違って口付けを知っていましたし、兄から貴方はとてもおモテになると聞いているし」

兄からは、彼はいつもいろんな人に囲まれていると聞かされている。特に同年代や年下の者から慕われているとか。実際は彼の立場上、身分にすり寄ってきている者達だとわかっているけど。

「……はあ、アイツは余計なことを。……でもね、私は誰とも付き合ったことはないからね。一夜のお付き合いかいということはないから。君を婚約者にした時から、君に対しては誠実でいようと心掛けてるのに」

「……一夜のお付き合いかいとは？ 不誠実なことなんですか？」

私は『一夜のお付き合い』がどういふものか知りながら、また意地悪く無知なふりをして質問をする。

それより彼が本当に知らない誰かと『一夜のお付き合い』をしていたら、この婚約は白紙になる。祖母が絶対に許さないだろうし、そんな不誠実な人のもとに嫁^とぎたくはない。

「うーん、どうも今日の私はいらないことを言ってしまうようだ。だから黙秘権を行使してはダメかい？」

「ならば、兄に教えてもらいます」

「それもそれで誤解が生まれそうな……。とりあえずその質問の回答は次回に持ち越してもいいかな？」

「……次回までに、きちんとしたご回答をいただけるなら。……誤魔化そうとしても、私は貴方の声の変化で、すぐに嘘はわかるんですから」

「君には敵^{かな}わないな」

彼はクスクス笑いながら、また唇を合わせてくる。

今度は軽いキスで、すぐに離れてくれた。

「次回に会えた時も、口付けを許してくれるかな？」

「それは、……貴方の回答次第でしょう？」

今度は私がクスクスと笑う。彼が他の人に目がいくことはないことを、私はわかっている。彼を信用している。でも信賴してはいない。未来は誰にもわからないのだから。

「……本当に君には敵^{かな}わないな」

『私の降参だよ』なんて彼は言う。彼は私の考えを正確に読み取り、『信賴される夫になるよ』と続け、また軽いキスをしてくれた。

ずっと離れていたのに、彼の私の考えを読み取る力には脱帽してしまう。

彼の帰る時間まで、何度も口付けを交わし、そのたびに私達はクスクスと笑い合いながら、『好き』

『愛している』と伝え合った。

僕こと、リアム・サファイアは五歳になったある日、階段を転げ落ちて気を失った。

二日後に目を覚ました僕は、寝ている僕を見ている人達の顔を見て、この煌びやかな人達は誰だろう？　と思った。

誰かが僕を『リアム』と呼び、『心配した』『目が覚めて良かった』と言ってくれる。『僕、そんな名前だったっけ？』と考えてみたけど、自分の名前が思い出せない。

端正な顔立ちの男性が、泣いている美麗な顔立ちの男性の肩を抱きしめ、一緒に喜んでいる。その微笑ましい姿を見て、『ああ、この二人、できているんだあ』なんてぼーっと思っていたら、おかしいことに気が付いた。

『あれ？　同性婚できる国って限られているよね？』

『僕は、いつの間に海外生活を始めたんだろう？』

と、全く状況が理解できなくて、頭を抱えて一人パニックに陥っていた。

そのうち、子供の一人が美麗な男性に『母上、リアムが変だよ？』と言った。……母上？　この美麗な男性が、母上か。……母上!?　え!?　男性だよね!?　もう一人の子も普通に『母上』と呼んでいるし!!

驚いた瞬間、リアムの記憶が一気に脳内に駆け巡ってきた。端正な顔立ちの男性は父で、美麗な顔立ちの男性は母、子供二人は兄であると思いついた。

そしてリアムの記憶の中には女性がいなかった。老人も大人も子供も男しか見たことがなかった。『なんだこれ!?』と更にパニックになりそうになった時に、次兄の顔を見て、僕はあぐりと口を開けて驚いた。

姉がやっていたBLゲームの攻略対象者エドワード・サファイアの幼い時の顔だ！　と。

姉からファンブックを見せられていたため、僕はその顔を覚えていた。ファンブックより少し若い顔立ちだけど、エドワード・サファイアだとすぐにわかった。

ならば、『リアム』と呼ばれた僕は、あの我儘放題の悪役令息リアム・サファイア!?

BLゲームの世界だと気が付いた僕は、前世の記憶を取り戻していた。それと同時に、前世の膨大な記憶が解放されて、脳内処理が追い付かず、僕はまた気を失ってしまった。

アダマス王国を舞台に繰り広げられるBLゲーム【宝石の交響曲^{シンフォニー}】。

家名に宝石の名前が入っている攻略対象五人と、男爵令息のヒロイン？　であるルテウスが剣と魔法で幾多の障害と困難を乗り越えて、学園卒業までに攻略対象とハッピーエンドを目指すゲームだ。

BLゲームだけあって、男しくない世界だった。

男同士なのに、子孫繁栄は？　と気になるところだが、そこはきちんと設定があつて、教会に行

けば子供ができる核をもらえるんだそうだ。

行為の前に受け入れる側が胎内に核を入れ、^{はら}孕むシステムになっていた。

その核はきちんと^{ふうふ}老夫として、教会に登録されないともらえないらしい。

そして僕は、名前に宝石の名前が入っているから攻略対象かって？ 違うんだな。

僕の兄が攻略対象者で、僕はヒロイン？ を邪魔する悪役令息。

悪役がいなければ、ゲームも物語も盛り上がらないだろ？

ちなみに階段から転げ落ちたのは、誰かに押されたとかではなく、僕が^{てすり}手摺を滑り台のようにして遊んでいたからだ。

全くの自業自得である。父ロベール、母キリルはもちろん、五歳上の長兄ルーフェス、二歳上の次兄エドワードにも叱られた。

でも目が覚めた時に、両親も兄一人も泣いて喜んでくれたから、僕はまだ家族に嫌われていなかったようだ。その後は甘んじて、みんなの説教をきちんと聞いたよ。

しかし、階段から落ちて前世の記憶を取り戻すって、テンプレにも程があると思う。骨折をしていなくて良かったよ。

で、話を戻す。【宝石の交響曲】だが、ゲーム内にミニゲームが満載されており、ここで攻略対象の好感度を上げていく。クイズ・パズルゲームはもちろんのこと、戦闘や簡単なRPGなども入っている。

姉は全く戦闘ゲームができないので、この時に僕が呼ばれて、姉の代わりにゲームをしていた。魔物からヒロインを守る戦闘ゲーム。

戦闘ゲームをしながら、姉がゲームの物語を教えてくれた。王子、側近、騎士、魔術師、教師の五人の攻略対象がいる。そして隠れ攻略対象も一人いる。

なのに何故かこのゲームの悪役はリアムしかない。どのルートを選んでも、リアムが邪魔をする。王子の婚約者だったり、騎士の兄弟、側近や魔術師の親友だったり、教師を尊敬していたりで、とにかくヒロインと攻略対象の仲を邪魔する。

最初は教科書や私物を隠したり、壊したり。それでもヒロインが^む挫けないから、段々と嫌がらせは悪化していく。しまいには殺人計画を立てたりしたそうさ。

兄弟や親友はまだしも、婚約者がいる人と恋仲になるってヒロインもどうなのよ？ とは思っただ。

ミニゲームに力を入れすぎて、キャラ設定が少し雑になったのかな？ ちなみにミニゲームはレベルが『かんたん』『ふつう』『むずかしい』『極むずかしい』の四段階ある。

『かんたん』の戦闘ゲームは確かに女性向けの簡単さだけど、『極むずかしい』はセミプロの腕前を要求されるレベル。一回の判断ミスで即終了となってしまう。

これ、本当に女性の購買層を狙っているのかな？ BLゲームオタク向けじゃないのかな？ と思うほど難しい。

戦闘ゲームはしているけど、恋愛のシーンになると僕は自分の部屋に帰りたくなる。男同士、い

や人の恋愛に興味はないのに姉は僕に見せてくる。しかも解説付きだ。

姉曰く、障害があればあるほど、恋とは燃えるらしい。僕は知らんけど。

そしてヒロインと攻略対象がハッピーエンドを迎えたら、リアムは処刑される。

ノーマルエンドなら、リアムは追放される。

バッドエンドなら、リアムは王子と結婚する。

隠れ攻略対象はハッピーエンド後に出会うので、リアムはもうゲームに登場しない。

ちなみに隠れ攻略対象の正体は、僕は知らない。姉が教えようとしてくれた気がするけど、戦闘ゲームには出てこなかったから覚えていない。戦闘力バリ高の騎士エドワード以外はあまり興味を持てなかった。王子なんて特大の魔法しか使えないせいで、すぐに魔力切れになってしまおうし。『王子のくせに!!』と何度思ったことか。

しかし、どのエンドルートになっても嫌だ。悪役令息のリアムに救いがなかった。

嫌がらせをしただけで処刑や追放って……。まだ国家転覆を狙って処刑されるだとかの方が、理由がはっきりしている。乙女ゲームやBLゲームって理不尽が通る世界なのかと思うと、現代日本に生まれ育って良かったと思った。……でも僕、今世は理不尽な世界に生まれ変わったんだ、としばらく落ち込みはしたけど。

それに『王子と結婚は幸せじゃないのか?』って聞かれたら、自信を持って『幸せじゃない』と、僕は答えるよ。

ただでさえ嫌いな相手と結婚なんてしたら、放置からの冷遇待ったなしだよ? そうなれば、今

のような生活は送れない。食事も出なくなるかもしれないじゃないか!? 愛はなくても、食事やおやつがないと生きていけないよ。掃除してもらえないし、服もボロボロなものしかなくなるかも!? 万が一結婚した際には、衣食住の確保はきちんと交渉しておこう!! その前に断罪回避が最善だけど。

それにラノベやネット小説を読む限り、王族になったら、有象無象を相手にマウントを取り続けなければいけない。一度侮られてしまうと、後は坂を転がるように侮蔑の対象になる。しかも王族なんて義務が多いのに、やりたいことは一割もできないらしい。趣味第一主義者の僕には厳しい世界だ。

折角、地位も財産もある家に生まれたのだ。しかも三男だから家を継ぐ責任も何もないし、迷惑さえかけなければ生涯養ってもらえる、かもしれない。そこは兄頼みになるけど。

なので、僕はよくよく考えて、【何もしないこと】を選択した。僕は我儘を言って王子と婚約をしなければ、悪役にならなくて済むという結論に達した。

ラノベではよく逆さまあの仕込みをしたり、ヒロインと良好な関係を築いたりなどあるけど、本当に彼らに対して何もしないことにしたのだ。

姉が見せてくれた漫画には、ゲームの強制力というものが存在する作品もあった。どんなに頑張ってもヒロインや王子達と仲良くなっても、強制力によって処刑されるパターンもある。……強制力、怖いよ、本当に。

第一、僕にそんなコミュニケーション能力はないから、ヒロインや攻略対象者と仲良くなる自信

はないし、恋愛脳でもない。

ならば、できるだけ関わりを持たないようにする。相手にしない、何もしないことにした。それにそんなことに時間を費やすのは勿体ない。時間は有限だ。だったら、前世でやり残したことをやり遂げたい！と意気込んだ。



それから半年間は、僕は大人しく部屋に籠るようになった。もう、階段の手摺で遊んだりはいない。

前世を思い出したのと同時に、やりたいことをひたすら行っていた。

それは、絵を描くこと。

そう、部屋に籠っている理由は絵を描くためだった。決して階段で遊んで怪我をして怒られたからではない。

前世の僕は、美大への進学を希望していたほど、絵を描くことが好きだった。中高と美術部だったし、何回かコンテストでも大賞や優秀賞をもらったこともある。ちなみに専攻は油絵だ。

幼い頃、両親と姉で海とイルカをテーマに描く画家の展覧会に行った。その時の衝撃が凄まじく、それ以来、絵を描く毎日となった。三日あればスケッチブック全部を埋め尽くすくらいに、毎日絵を描いていた。放課後、友達と遊ぶより絵を描く方を選んだほど、僕の思考の半分以上、いや九割

は絵を描くことだった。

時には寝食を忘れることもしばしばあり、母と姉から呆れられ、叱られることは少なかつた。それに僕は、瞬間記憶能力が元々高かつたようで、小学生高学年になる頃には写真並みの絵を描くことができるようになっていた。何気なく描いた絵が『写真みたい』と言われたのがキッカケだったと思う。緻密に描く練習を重ねた結果、鉛筆画なら白黒写真並みに描けるようになっていた。

小学生の頃は水彩絵の具を使っていたけど、中学校の美術部で油絵を習ってからは、油絵にのめり込んだ。

独特な油絵の具の匂いは姉に不評で、最初の頃は『家で描くな！』と怒られたけど、段々と諦めて何も言わなくなつた。学校でも家でも絵を描き続けた。大学受験の時、高校の担任からは『実技は安心だから、学科でコケるなよ』と何度も言われたくらい、先生にも認めてもらえるほどに腕は上がっていた。ちゃんと勉強もしていたよ。それこそ学科でコケたら、泣くに泣けないじゃん！そして今の僕にもその能力が引き継がれていて、五歳とは思えない絵を描くことができるようになった。

両親も兄達も絶賛してくれた。父は喜んでスケッチブックや高い絵の具を買ってくれたし、祖父も物凄く褒めてくれて、アトリエを作る計画まで立ててくれた。

僕は嬉しくて、両親や兄達、祖父母、屋敷の庭や部屋から見える街の風景など、飽きることなく毎日描き続けた。

◆
しかし季節が真冬になった頃、僕は流行り病に罹^かってしまった。
薬もあまり効かず、一週間意識が朦朧^{もうろう}としながら、高熱と闘っていた。
僕は熱に躰^{からだ}される中、懐かしい前世の記憶を夢で見ていた。

姉に頼まれてミニゲームをしながら、ゲームの内容を聞いていた。

攻略対象者の攻略はコンプリートできたけど、隠れ攻略対象者へのルート解放の鍵が見つからなくて、諦めかけた時にファンブックが発売され、ヒントになるかと思いついたそうだ。

隠れ攻略対象者へのルートは、王子・騎士ルートからしか開かれず、開くためには悪役令息の生存も不可欠らしい。ノーマルエンドから悪役令息との和解が最低条件であると書かれてあったと教えてくれた。

『でも、ノーマルエンドでも悪役令息は追放だから、和解をする時間なんてあるのかな?』と聞いたところ、『極むずのバズルと戦闘をクリアしておく、追放前に悪役令息に会えるらしいの。だから頑張つて!』と返されてしまった。

その後、ファンブックの人物設定を読んでいた姉が泣き始めた。こっちは、極むずのバズルゲームに悪戦苦闘を強^しいられて、慰める余裕がないのに!

◆
なんとかクリアできたところで、姉に泣いたわけを聞いた。姉は、また泣きそうになるのを堪^{こら}えながら教えてくれた。

サファイア公爵三男リアム。

元皇族である父方の祖母の高貴な顔立ち、祖父と父の白金の髪、アメジスト侯爵家出身の母の珍しい紫電の瞳を引き継いでいる。

また、末っ子という立場もあり、周りは存分に甘やかした。リアムの願いは、なんでも叶った。三歳になった頃、簡単な礼儀作法の教育が始まる。貴族である以上は身につけないといけないことだけど、リアムはじつとしてられない性格だった。

『僕は自由を愛する男だ』なんて、何かの本の台詞を引用して、礼儀作法の教育から逃げる。逃げてでもすぐ捕まり、結局のところ作法を学ぶ羽目になるのだけだ。

家族が揃う夕食で、リアムは一人、音を立てて、ぐちゃぐちゃに食べてしまう。

リアムはまだ一人で上手に食べられなかった。

リアムは他の子よりも身体が小さく、手より大きいカトラリーを上手に扱うことができない。この世界に、子供用のカトラリーはなかった。

父達も一生懸命に丁寧に食べようとしているリアムの姿を見ているから、少しだけ顔を顰めても、叱ることはしない。

ただ『リアムは仕方ないなあ』としか言わなかった。

母も、リアムの食事の介助などはせず、困ったように笑うばかりだった。

兄達は、父達がそんなリアムだけ許す姿を見て、リアムと関わりを持たなくなっていく。末っ子だから許されると思ってしまう、リアムに対して良い感情を持たなくなっていく。

両親は、成長が遅いリアムを見守っていただけに過ぎなかったが、兄達としてはそれが面白くなかった。

リアムが五歳になった頃、一般教育が始まる。

この頃には、兄達も使用人達もリアムの『自由を愛する男』の言動に呆れ果てており、その話は父である公爵にも伝わっていた。

父は領地経営で忙しいため、都度リアムを呼んで叱ってばかりもられない。

母も父の補佐や家の切り盛りをしているので、リアムだけを構うわけにいかない。

兄達も自分のことで忙しくしていたため、家族の誰もがリアムに寄り添わなくなった。

リアムも五歳になれば、流石にある程度の分別は付き、我儘も言わず、勉強、礼儀作法、剣術と家庭教師に言われるままをこなす日々だった。

そんな中、一人の家庭教師が『兄君達は優秀なのに』と言い出した。

リアムは決して頭が悪いというわけではないのだが、覚えるまでに兄達より時間を要する。兄達はすぐに覚えたことも、リアムには時間がかかる。人は比べたがるもので、一人が兄達と比べ出したら、周りも比べ出した。

根っこの部分は素直なリアムにとって、その言葉は悪意の塊でしかなかった。

勉強をしても、剣術を学んでも、六歳から魔法を学んでも、いつも兄達と比べられる。

テストで良い点数を取っても褒められることはない。剣で騎士に一撃を入れても、魔法で強い攻撃魔法が打てても、それは当たり前で、しかも『上の兄君なら』『下の兄君の方が』と枕詞のように言われる。

家庭教師のそのような評価に、父達も『三男だから甘やかしすぎたか』と、何も言わなくなったし、報告を聞くこともなくなった。

勉強の時間は、物覚えが悪いと鞭で腕を叩かれるようになる。剣術の時間は、必要以上に剣で身体中を打たれる。しかも鞭も剣も服に隠れる部分を狙われる。

それに我儘だったリアムの世話をしたがる使用人はおらず、リアムが魔法でお風呂の準備をして、一人で入るようになっていたため、傷やアザだらけの身体には、誰も気が付かなかった。

食事も家族と一緒にの夕食以外は準備されなくなった。

誰もリアムを見ていないので、どんなに食事のマナーが悪くなっていたかも、家族は気付かないままだった。

お腹を空かせても、使用人の誰一人として動いてくれなかった。執事に言えば、父や母にすぐに

話が伝わり改善されると思ったけど、リアムが我儘を言っていると誤解され、叱られて終わった。そんな環境で、リアムが笑わなくなるのは早かった。

八歳の顔見せのお茶会で王子と会話して、笑いかけてくれたので、『王子様が僕を救ってくれる』とリアムは思った。

困っている人を助ける絵本の王子様のような容姿の彼に、リアムは勝手にそう思い込んだ。だから父にお茶会の報告に行った際、無理を言って王子の婚約者にしてもらうことにした。

王子が、自分を家庭教師から、使用人から、何よりも無関心な家族から救ってくれると信じた結果だった。

でも、リアムの悪い噂を聞いていた王子は、リアムには優しくしてくれなかった。

王子は、王子様でなかった。

王子は婚約者になったリアムを助けるどころか、更に奈落へと突き落としていった。

側近もすまなそうな顔をするが、助けてくれることはなかった。王子の護衛騎士を目指している次兄に至っては、リアムをいない者として扱った。

王子妃教育が始まると、より身体中の傷は増えた。努力して覚えても誰にも褒められない。王宮でも鞭が振るわれ、鞭の傷は腕だけでなく、背中や脚にまで及ぶようになった。

しかも、噂を聞いている王宮の者の嫌がらせで、お茶やお菓子に異物を入られることも多々あった。王子不在のお茶会でクッキーにガラス片が入っていたことがあり、その時は口の中がズタズタ

に切れてしまった。

口から血を流すリアムを見た王宮の使用人達は大騒ぎをした。流石に王族の婚約者が流血していれば、騒ぎにもなる。

リアムは急ぎ救護室へと運ばれた。

医師が診察を行い、魔術師に治癒魔法をかけてもらい治ったが、リアムはこれ以降、食べるたびにまたガラス片が入っていたら、毒が入っていたらと考えてしまい、あまり食べられなくなっていた。父達のもとにも連絡はあったが、誰もリアムを迎えに来ることはなかった。

婚約者が王宮で怪我をしたのに、王子も見舞いに来ることはない。ガラス片を混入した犯人は見つかり処罰されたが、いつの間にか、リアムが王子の気を引くための自傷行為だと噂されるようになっていた。もちろん、リアムの言い分など誰も聞かなかったので、真実は闇に葬り去られる。

日に日に痩せ細っていくリアムを見ても、誰も何も言わなかった。

学園に通うようになって、リアムに近づこうとする者は誰もいなかった。

一方で王子、側近、次兄達はヒロインであるルテウスと仲を深めていった。

家でも王宮でも学園でも、リアムの居場所はなかった。

食事をあまり取れないリアムは、養護室でたびたび休ませてもらうが、そのたびに養護教諭は嫌な顔をした。

リアムの噂は教師の耳にも届くくらい、良くないものばかりになっていた。

そんな時に、昼休み時間は裏庭で過ごしていたリアムと魔術師志望の彼は出会う。あまりに痩せ細ったリアムを見て、彼は飴を一つくれた。

目の前で彼が舐めたから、リアムも口に入れざるをえなかった。

久しぶりの飴はとても甘く、美味しかった。リアムは思わずポロリと涙を溢した。

それから時々、彼と話をするようになった。

彼は国一番の魔術師になるという目標を持って学園に入学してきたと言っていた。

今のリアムは、目標も夢もなかった。生きる気力さえも。だから、キラキラした瞳で語る彼が眩しかった。

そんなある日、いつものように裏庭にいたリアムのもとに彼がやってきた。しかも何か怒っている様子だった。

彼は『お前は、やっぱり最低な奴だ！』といきなり言い放ち、走り去っていった。

リアムは何故彼にそんなことを言われたのか、わからなかった。わからないけど、彼に嫌われたことは理解した。

リアムがルテウスをイジメているという噂が流れ始め、学園中が知るところとなったが、親しい友人もいないリアムは直接噂を耳にすることはなかった。

彼もいつの間にか王子達と一緒にルテウスの周りにいるようになっていた。

王子、次兄、側近、魔術師志望の彼、養護教諭がルテウスを囲み、笑い合っている光景を見た時に、リアムは全てを捨てた。家族も婚約者も感情も涙も全てを捨てた。

学園の最高学年になった年に、特級の災厄がアダマス王国を襲った。ルテウス、王子、側近、騎士の次兄、魔術師志望の彼、養護教諭らで、災厄である魔物を倒したという話を聞いた頃、ルテウスは教会から聖者に認定された。

そして、王宮で開かれた祝いのパーティーで、リアムは学園でルテウスを害していたとして断罪された。

王子達や家族から、自分に向けられる憎しみの目を見て、リアムは微笑んだ。久しく笑った姿を見せていなかったリアムの心からの笑顔は、人々を魅了するほどだった。

しかし王子達はリアムの微笑みに、何故か背筋が寒くなった。微笑む理由がわからなかったからリアムは微笑んだ後、隠し持っていた即効性の高い猛毒が入った小瓶の栓を開けて、ゆっくりと口に含んだ。

甘い香りの毒だが、とても苦かった。でもこの頃のリアムは、もう味覚も痛覚もなかった。そしてこの毒に解毒薬はない。リアムは誰にも見つからないように製造方法や材料を探して、自ら作っていた。試験はしなかったけど、リアムはこの毒で死んでも死ななくてもどちらでも良かった。

それにリアムはわかっていて。自分はみんなの嫌われ者だから、今日この場で断罪されることを。もう体力は限界だったし、それなら他人の手でなく、自らの手で幕を降ろしたい。これがリアム

の最後の望みだった。

リアムが血を吐くまで、周りはリアムが何を飲んだのかわからなかった。

リアムは血を吐きながら、倒れる。

そして『やつと……×××』という言葉を残して死んでいった。最後の言葉は誰も聞き取れなかった。

リアムの死で、祝いの席が阿鼻叫喚の場と変わり、パーティーは中断された。

その後リアムの飲んだ毒を調べるために医師達が検死を行った。そして、毒の成分と共に身体中の至るところにある傷痕も確認された。食事をあまり取れていないことで栄養失調状態になっており、医師達はこの身体で日常生活を送っていたことを不思議がった。

王子はもちろん、家族もリアムがそんな状態だったとは知らなかった。いや知ろうとはしなかった。遺体をよく見れば、頬はこけていて、爪はボロボロ、髪に艶はなかった。手を握れば掌の肉はなく、すぐに折れそうな骨でゴツゴツしていた。

高位貴族の、しかも公爵家の子息とは思えない姿に、家族や王子、側近達は、言葉も出なかった。

五歳までの我儘なリアムがそのまま成長していたと家族は思い込んでいた。

父である公爵が蔑ろにしているからと、それに倣った使用人や家庭教師達。

悪い噂を鵜呑みにして無関心を貫いた王子、それに倣った王宮の者達。

学園では、王子達に気に入られているルテウスを気に入らない者達が、リアムの名を騙ってルテウスに酷い行いをしていた。そして、犯人以外の誰もが、我儘なリアムがやったことだと思っていた。ルテウスさえも、王子と仲良くなつていくほど嫌がらせは苛烈になつていくので、婚約者であるリアムが犯人だと決めつけていた。

実際のリアムは何もしていない。リアムの最後の我儘は、八歳の時に王子との婚約を望んだことだけだった。あれから我儘はおろか、日常のお願いすらリアムは誰にも言わなかった。

リアムの死後、見つかった日記によって、家庭教師や使用人からの仕打ち、家族の放置、王子からの心ない対応、学園の日常など、リアムの真実がわかった。

日記の最後には、『ごめんなさい』とだけ書かれていた。何に対しての誰への謝罪なのかは、永遠にわからないままとなる。

リアムの真実がわかったところで、謝罪する相手はもうこの世にはいない。

今更ながら、公爵達は後悔した。しかし嘆き悲しんだところで、リアムが生き返るわけではない。誰に罪があるのか調べれば調べるほど、リアムに関わった者で全く罪がないと言える者は、一人もいなかった。

幼い頃は本当にやんちゃで我儘だったけど、天使のように屈託なく笑っていたリアムは、もういないのだ。

ただ彼の死に顔は、臓腑を焼くような痛みや吐血などで苦しかったはずなのに、とても穏やかな

顔だったと言われている。

何もしていないのに、悪役令息に仕立て上げられたリアム・サファイアは、十七歳という短い生涯に自ら幕を降ろした。



ファンブックに書かれてある内容を教えてくれた姉はまた静かに泣き出す。

僕はただのBLゲームなのに、そこまで深い設定があるんだと、思わず感心したと同時にやるせない気持ちになった。

ゲームスタッフやシナリオライターは、何を思っこの悪役令息の設定を考えたのだろうかとも、考えてしまう。

悪役なんて、見方によっては正義にもなる。主人公を際立たせるスパイスというだけではない。彼らも確かにその世界で踏ん張りながら、生きているはずなのに。

リアムの場合、誰も味方になってくれる人がおらず、【悪役令息】の役を勝手に当て嵌められただけに過ぎない、ただの少年だった。家格が高かったせいなのか、両親がきちんと子供と接していなかったからなのか、【悪役令息】になった原因なんてわからない。ただ、リアムが可哀想だという思いしかなかった。

そして姉と僕は、この日より悪役令息リアムが幸せになれるルートがないかを探した。しかし、

悪役令息救済のルートはなかった。ヒロインのバッドエンドのエンディングで流れてくる画面には、王子と結婚式を挙げる姿が映し出されたけれど、王子は困ったような張り付いた笑顔で、リアムは感情を全て切り捨てたような無表情だった。バッドエンドはヒロイン、王子、悪役令息三人のバッドエンドなんだろう。

姉と僕は、本当にやるせない気持ちになってしまい、これ以降、姉は【宝石の交響曲】をぱたりとやめた。



熱が下がった頃、やっと高熱と苦しさから解放されたと僕は安堵した。

懐かしい夢を見た気がするけれど、内容は覚えていない。

目を覚ましてから時間は結構経つけど、まだ部屋の中は暗かった。僕は真夜中に目を覚ましてしまったようだ。

もう一眠りしようかと思った頃、暗闇の中から母の優しい声が聞こえた。

「リアム、やっと熱が下がったのね」

そつとおでこに母の掌を乗せられて熱を確認されているようだ。

「母様？ 熱は下がったみたいです。……それより、何故この部屋は暗いのですか？ 母様のお顔が見えませんか？」

「!? だ、誰か医者を!!」

「母様？」

母は大声で叫んだ後、僕をきつく抱きしめて離さなかった。熱が下がり、苦しさから解放されて安堵したのは、ほんの一瞬でしかなかった。

すぐに呼ばれた医者診断によれば、僕は高熱により視神経を損傷して、目が見えなくなっていた。そして治癒魔法でも回復は見込めないと、医師が深刻そうに話す声が聞こえた。

しかも高熱で子種を作る機能も失われたことも診断された。

三男だから、どこか政略的な相手に嫁ぐことはわかっていたし、子種を作る機能が失われても、孕む側になるだけで別に問題はなかった。前世でも恋愛よりも絵を描く方が忙しかったから、生涯独身でも構わなかった。

ただ視覚を失ったことに絶望した。……もう絵が描けないことに。

そして僕は思い出した。前世、美大の学科の受験日に、交通事故ではかなくなくなってしまったことを。交差点で信号待ちをしていたところに、凍った地面でスリップしたトラックが僕を目掛けてきたことを。その後の記憶がないから、多分前世はここまでだったのだろう。

僕の生は、前世も今世もいつも突然に奪われていく。今世はまだ死んではないが、目が見えないなんて、今の僕にとっては死んだも同然だった。

僕はよほど神様に嫌われているらしい。まるで僕から絵を描くことを取り上げているように思え

る。たとえば、これが決められた運命であっても、僕は素直に受け入れる気は全くない。

両親は医師の診断を聞いて泣いていた。兄達は泣いてはいないようだ。でも顔は酷く沈んでいるのだろうと予想する。

父は医師に『どうにかして治せないのか!?』と叫んでいた。

母は『リアムは本当に絵が描くことが好きなのに……』と嘆いていた。

僕は父と母、医師の声を遠くに聞きながら、思い出したかのようにベッドから降りて、ふらつきつつ机に向かって歩く。

みんなは僕の突然の行動に驚き、部屋は静かになり、ただ見守るだけのようなだった。

自分の部屋だから目は見えなくなっても、どこに何があるかは把握している。勉強用の机まで歩く。もうすぐ机というところで手を前に出して、机だと思ふものの感触を確かめ、椅子を確認して、ひたひた抽斗を探り当てて開ける。そこに入れておいたペーパーナイフを手探りで取り出す。

目が見えないなら、もう、未練なんかない。

僕はペーパーナイフを首筋にヒタツと刃を当て、思いっきり横に引いた。

「リアム!!」

嘆き、その場に崩れ落ちているだろう母以外は、僕のその行動に驚き、慌てて僕を止めようとした。長兄の動きは速くて、あっという間に僕の手のペーパーナイフを叩き落とした。ペーパーナイフがコロンと絨毯じゅうたんに転がる。

僕の首筋には微かな切り傷ができただけだった。ナイフはナイフでも、ペーパーナイフだから、元々の殺傷能力は低い。そんなこと普段ならすぐに気が付くのに、僕には今は絶望しかなく、死を望むだけだった。

僕のもとに駆けつけた父は、ぎゅっと抱きしめてきた。

「……なんで？ ……なんで死なせてくれないの？」

ポロポロと見えなくなった瞳から涙が溢れ落ちる。僕は父に訴える。

「目が見えないなら、もう、絵を描くことができないじゃないか。それに、家族のお荷物にしかないなら、僕が生きていても、意味なんて……ないよ。……死なせてくれないなら、殺してよお」

しゃくりあげながら、僕は言う。前世よりも技術・文化・制度が発達していない今世。保険や年金なんてない、障がい者が生きるには厳しい世界。

何より、絵をもう描くことができないなら、すぐにでも来世に願いを託したい。

僕の言葉に、兄達が苦しい呻き声を上げる。

「リアム、リアム。よくお聞き。私も母も兄達もリアムが病から生還できただけで嬉しいんだよ。

今回の流行り病は本当に多くの人が亡くなったんだよ。母上、リアムのお祖母様の兄君も、この病で亡くなったんだ。だから、リアムが助かっただけで、私達は嬉しい。目が見えなくなっても、決してお荷物なんかじゃないんだよ。リアムのためなら、私達はいくらでも助力を惜しまない。だから自死だけはやめておくれ」

父は更にぎゅっと僕を抱きしめ、そう言った。

「……亡くなった人が、多いの？」

「そうだよ。熱冷ましの薬も治癒魔法も全く効かない流行り病だったんだ。だからみんな、リアムの無事を神に祈った。折角助かった命を、簡単に投げ出さないでおくれ」

父が泣きながら話してくれた。その涙が僕の頭を濡らしていく。

「……ごめん、なさい。……父様、母様、兄様、ごめんなさい。……うう、うわーっ！」

僕は父にしがみつき、思いきり泣いた。

目が見えなくなった悔しさ、助かった命を簡単に捨てようとした愚かさへの後悔、家族が僕を大事に想っていてくれることへの感謝、色んな感情が僕の中でぐるぐるになっていた。

叫ぶように泣いていた僕は、そのまま父の胸の中で眠ってしまった。眠っている間に、医師に首筋の傷の手当てをされた。

その後、母と次兄は毎日僕に付き添ってくれている。仕事や勉強の時は、僕を隣に座らせて片時も目を離さないようにした。あの出来事は、母と次兄にとってトラウマになってしまったようだ。『もうあんなことはしない』と言っても、必ずどちらかの目の届くところにいるようにされた。

仕事のある父や学園に通っている長兄は、空き時間ができたときに僕の様子を見に来るようになった。

僕は、目が見えなくなったことにゆつくりと慣れていくしかなかった。

歩くことも食べることも自分一人できなくなって、その都度誰かに介助される。僕は、助けて

くれて『ありがとう』と、僕のために大切な時間を使わせて『ごめんなさい』をその都度繰り返す。みんなは『リアムにしてあげたいんだから、気にしないでほしい』とか、『私どもには勿体ないお言葉です』と言ってくれる。家族も使用人も、僕を大事にしてくれているのは雰囲気であつたから、僕は感謝を忘れずに『ありがとう』だけは言い続けることにした。

僕の感情が落ちてきた頃に、流行り病の話聞いた。

王都に住まう人の四割はこの病に罹り、罹^{おそ}えた半分以上の方は亡くなり、病が治つてもなんらかの後遺症が出た人が約二割らしい。しかもこの病は隣国・隣々国でも猛威を振るつた。

平民で医者にかかれなかつた人もいるので、実際の感染者はわかつている以上に多いのかもしれない。

しかも亡くなった人の多くは子供や老人だつた。体力のない者から高熱に耐えられず、そのまま儚^{はかな}くなつていったのだとか。

後遺症として多かつたのは、僕みたいに子種を作る機能を失つた人だつた。前世でも、成人男性があまりに高熱を出すとそうなつてしまうという話を聞いたことを思い出す。他に手足が常時痺^{しび}れるとか、酷くなると歩くことすらできなくなつた人もいるそうだ。

今回の流行り病を重く受け止めた国の重鎮達によつて、新薬の発明や医師の拡大雇用などの話し合いがされたと聞いた。この悲しい出来事を忘れてはいけしないと、王都の一番大きい広場に慰霊碑が建てられることになつたそうだ。

そして、祖母の兄もこの病に罹り亡くなつたと聞いた。祖母の兄は医師で、多くの患者を助けようと奮闘していた中、罹患してしまつたそうだ。祖父母はその計報を聞き、急ぎ祖母の国に戻つた。次兄が教えてくれたけど、祖父母はもうこの国には戻らないかもしれないらしい。祖父母が大好きな僕は、大きな声を上げて泣いてしまつた。

この時、屋敷にいた家族、使用人達は僕の泣き声に驚き、慌てて僕のもとに來たという。母が有^あめても、父が抱つこしても、兄達が頭を撫でても、泣き止まない僕。その日は泣き疲れて眠つてしまつた。

祖母から『一年後には帰ってくる』と手紙が届くまで、僕は毎日ベッドの上で泣いていた。流石にこれには、家族も使用人達も困り果てていた。だけど、祖父母がいなことが悲しくて勝手に涙が出てくるから、僕としてもどうしようもない。

祖母は約束を絶対守ってくれる。だから手紙の話を聞いて以来、泣くことを我慢するようにした。



六歳の誕生日を迎えると、両親と教会に行き、僕の魔力量や属性などの検査をした。この世界では魔法が使えたことを、僕はすっかり忘れていた。戦闘ゲームでは、体術・剣術・魔法を駆使していたものだ。

魔法の呪文なんかは覚えてないけど、僕にも使えるかもとわかつたら、気分が上がつた。

攻撃魔法は使えなくても、治癒系魔法が使えるなら、もしかしたら視力を取り戻せて、また絵を描くことができるのではないかとまで期待をしてみましょう。

視力を取り戻せたら、父や母、兄を描こうかな？ 抽象派・印象派の絵も描いてみたいな、とあれこれ夢を見ていた。

検査は小さな部屋で神官と二人きりで行われると、行きの馬車で父が説明してくれた。僕を椅子に座らせた後、父は退出していく。

神官が『失礼します』と言って僕の右手を取り、丸い水晶に掌を乗せる。

この時に、水晶に僕の情報が表示されたらしい。

そして、予めセットされていたステータスカードに内容が読み込まれていく。

検査が終わると、ステータスカードを渡された。

一度登録されると自動更新されるので、成長したことがすぐにわかる仕組みになっているそう。自分の成長具合がカードに表示されるなんてすごい!!

このカードは街の出入りだけでなく、商業ギルドや冒険者ギルドを利用するにも必要になるので、なくしたらまた教会に来ないといけない。その際は有料で、平民の一年分の収入と同じくらいのお金が必要になると言われた。

カードには個人情報が入って盛りに表示されているので、家族であろうと見せてはいけないと説明をされた。僕は目が見えず読めないことを神官に伝える。見えないから、誰かに見せないと内容

がわからない。

「大丈夫ですよ。目の見えない、字が読めない方でも、カードに魔力を流したら、頭の中でその情報がわかるように表示されます。魔力の扱いも、今ここで簡単に教えましょう」

「はい、ありがとうございます」

神官から魔力の流し方を教わり、カードを両手で挟んで試してみる。

身体から少し力が抜ける感覚があつて――

リアム・サファイア（六歳）

と、頭の中に僕の名前が浮かんだ。無事に魔力を流せたらしい。

そのことを神官に伝えたら、更に説明された。

「詳しい情報を見なければ、帰宅してからの方がよろしいでしょう。詳しいことを知るには、更に魔力を消費します。万が一魔力切れになると倒れてしまうので、気を付けてください。魔法の適性がわかりましたので、ご両親に相談しながら学ぶようにしましょう」

「わかりました」

「では最後に。今回知りえた情報につきまして、神の御名におきまして、私、神官ラウドは口外・公開することはありません」

神官が宣言すると、神官と僕の間から澄んだ風を感じた。

「ふああ！」

「今のは誓約魔法です。神とリアム様と私以外はこの情報に関しては話しませんという誓約になります。清浄な空気が流れ込んだのは誓約が成立した証です。どうか、その清い御心のままお過ごしくださいませ」

そして部屋の外で待機している両親を呼んでもらい、また父に抱っこをされて、教会を後にした。家に戻ってきて、自分の部屋のソファに座った僕は、早速カードに魔力を流してみる。

リアム・サファイア（六歳）

体力…二十四／三十

魔力…二〇七三／二二一五

称号…サファイア公爵三男・前世記憶保持者・全盲

魔法適性…水・土・無

と表示が頭の中に浮かんできた。

動き回ることがなくなっただから、五歳の時より体力は格段に落ちているのだろう。前世の記憶を取り戻してからは、絵を描いてばかりいたし。

魔力は多いのか少ないのかわからなかった。魔法適性の『無』の意味するところもわからないので、これは後で父に聞くことにしよう。

僕の属性は水と土。水なら攻撃にも防御にも使えるし、土は領地に引き籠つても、畑とかで領民のために使えるよな。悪役令息になる予定はないし、これなら結婚しなくても十分家族のために何かができる。称号に【全盲】と表示されているけど、これはすでに決定なのかな？ これも父に聞いておかないといけない案件だな。

久しぶりの外出に疲れた僕は、頭に流れてくるステータス画面を見ながら、そのままソファで眠ってしまった。



「魔法適性の『無』ってなんですか？」

本日の夕食は、父に食べさせてもらっている。夕食は毎日家族が交代で食べさせてくれる。

父の一口はちよつと大きめだけど、僕の口の動きを見て二口目は小さめにしてくれる。

ちなみに母は僕の様子をしっかりと見て、タイミング良く口に運んでくれる。

長兄は、『次は何が食べたい？』と細やかな気遣いをしてくれる。

次兄は、食べ物を含みすぎないように慎重に食べさせてくれる。

家族の性格がわかる時間でもあった。でも共通してみんな僕に構いたがるのは何故なんだろう？ 朝と昼は使用人が食べさせてくれる。僕は知らなかったが、使用人からの希望が多かったらしい。本当に何故？

「リアムは、『無』が出たのかい？」

「はい」

「なら食べ終わってから、魔法の話をするよ。今はきちんと食べようか」

「はい」

もぐもぐと口を動かして食べることに集中した。父様、もう少し小さめでお願いします。

食事の後、父の執務室に家族全員が揃った。

「リアム、魔法適性は『無』だけだったのかい？」

「いえ、水と土もありました」

「魔法適性は七種類あるんだ。火・水・土・風・光・闇・無だよ。火とか水はわかるよね？」

「はい。わかります」

「無は、火などの六種類に当て嵌まらない属性のことだよ。例えば、騎士に多い身体強化や神官の治癒魔法が無属性に当て嵌まるんだ」

「なるほど。僕は身体強化や治癒魔法が使えるんですか？」

身体強化や治癒魔法が使えることは、つまり！僕は期待を膨らまして、父の次の言葉を待つ。

「……うーん、リアムには難しいかな」

「何故です？」

え？何が難しいの？

「リアムは見えないからね。どんな状況かもわからないのに、それらの魔法を使つては危ないんだ」
「……そう、ですか」

折角の魔法も、目が見えないだけで使えないということに、しょぼんと気持ちが沈んだ。

治癒魔法で過剰に身体を治した場合、命を縮める危険が出てくるのだと、父は教えてくれた。病気に人にかけると病原体を活性化してしまうので、医者^{しやうと}の診断があつてから治癒魔法をかけてあげるのが基本らしい。医学はやっぱり素人^{しやうと}が手を出す分野ではないと思つた。

明らかにがつかりした僕に次兄が言い出す。

『『探査』魔法はどうかな？これを覚えれば、屋敷の中なら自由に歩き回れるんじゃない？』

「そうだな、エドワード！よく思い出したな！」

長兄が次兄を褒めた。次兄はえへへと笑っている。

『『探査』？』

『『探査』魔法は冒険者の多くが使う魔法の一つで、森やダンジョンに魔物がいないかとか、罠がないかを調べる魔法なんだ。屋敷の中に罠はないけど、人や家具にぶつからなくなるし、階段の上り下りもできるかもしれないよ』

「……僕、一人で歩けるようになるの？」

「沢山練習してからだよ」

と、父は言う。つまり探査魔法を覚えたら、屋敷の中は一人で歩き回れるようになる。もしかしたら、庭くらいは走れるかもしれない。

「僕、やる！ 沢山練習する！」

僕の久しぶりに弾んだ声を聞いて、母は嬉し涙を浮かべて、父と兄達も笑顔になったと、後で使用人からこっそりと教えてもらった。使用人達も僕の笑顔が見られて良かったと言ってくれた。僕は本当に周りに恵まれていると心から感謝した。

父も兄達も探査魔法を使えるので、三人から教えてもらえることになった。やり方を聞いて、前世の記憶にある潜水艦のソナーみたいだと思った。音波を発して、跳ね返ってきた反応を見て、距離や大きさを測るやり方だったと思う。探査魔法はそれに近かった。

実際に探査魔法を使ってみると、白黒のサーモグラフィみたいだった。形はなんとなくわかるけど、温度がないものは風景と一緒に黒いまま。人や馬などの生きているものしかわからなかった。だから、まだまだ一人で歩くことはできない。練習を重ねて探査魔法の精度が良くなると、個人の識別までできるそうだ。

今の僕は声でしか人を識別できないので、個人の識別を目標にして、練習することにした。

探査魔法が使いこなせるようになった頃、祖父母が帰ってきてくれた。沢山のお土産と一緒に。僕の目が見えなくなったことを祖父母は嘆いた。けれど、祖母は学園に通えない分、勉強を教える intent 込んだ。一緒に身体を動かそうと、祖父も提案してくれた。

『できなくなってしまったことはいっぱいあるかもしれないけど、やれることはまだまだいっぱい

あるよ』と祖母が言ってくれた。

『子供は伸びしろしかないからな』と祖父も僕を励ましてくれた。

いつも前向きな祖父母。だから僕はこの二人が大好きなんだ。



そう言えばこの世界、BLゲームだったな、と思い出したのは八歳となり、学園に入学する年齢の頃だった。

目が見えない僕は学園に通うことはできないけど、入学前の七、八歳の子供の顔見せのお茶会が王宮で開かれる。一応僕のもとにも招待状が届いたが、両親は無理に出席しなくていいと言ってくれた。確か、このお茶会でリアムが王子に一目惚れして、父にお願いをして無理矢理婚約者になるんだったと思う。今の僕には一目惚れというものは無理なので、一つ懸念要素がなくなっていることに気が付いた。

次兄と王子は同じ年齢だが、次兄の口から王子の話聞いたことがなく、すっかり忘れていた。王子にはまだ婚約者が決まっていなかった。王子妃教育もあるから学園入学前に決まるのが通例だが、あの流行り病によって長兄より下の年代の子達の数が少なくなったせいで、王子妃として家柄・適性などが相応しい子供がまだ見つからないそう。一応僕も候補に挙がったらしいが、全盲になっちゃったので、早々に外されたと父から聞いた。

『次兄は？』と聞いてみたら、なんとも言えない雰囲気になった。多分みんな困った顔をしているのだろう。

「誰があんな奴のもとに嫁ぐか！」

と、次兄が怒り出したのには驚いた。

後からこつそり長兄に聞いたら、二年前のお茶会の時に、次兄は王子と口喧嘩をしたようだ。それ以降、二人はともに口をきいていないらしい。喧嘩の内容については、次兄が誰にも言わなくてわからないのとか。

そう言えば、次兄が『騎士になりたい』と言わなくなったのもこの頃だった。本当に何があったんだろう？　つてあれ？　ゲームのストーリーから色々と離れてきている。元から何もしないことにしていたが、ここまで色々と変わるとは思わなかった。僕は王子の婚約者にはなれないし、次兄も王子の騎士にはならないみたいだ。

ただ、戦闘ゲームで僕が重宝していた次兄の騎士姿が、リアルで見られるかも少し期待をしていた時期があったから、残念に思えた。次兄はやっぱりなどところもあるが、基本的に優しいし、正義感が強い。剣の鍛練も休まずに行っていると聞いている。なのに、なんで騎士を指さなくなつたのか、次兄が誰にも理由を話さない以上、僕も家族も何も聞けなかった。

そしてお茶会は、全員の僕が参加しては迷惑になるので欠席すると返事をしたら、付き添いを連れてきても構わないと、再考を促された。

父も母もこんな返答が来ると思わなかったみたいだけど、これでは出席するしかないと言うので、

誰が付き添うか話し合いをして、次兄に決まった。父と母は領地に行くことが決まっていたし、長兄は学園の用事があった。父達は次兄にくれぐれも喧嘩はしないようにと、口が酸っぱくなるほど言い聞かせていた。

僕は学園には行っていないけれど、父が家庭教師をつけてくれて勉強をしている。ただ先生の話すことを聞き、質問に対して受け答えするしかできない。前世みたいに点字なんてないから、本も読めないし。

探査魔法も家庭教師と一緒に沢山練習した。その結果、家族や使用人達の違いが少しずつわかるようになってきていた。最初は暗闇に白い人型が見えているだけだったけど、段々と身長や体形がくつきりとわかるようになってきた。でも、姿形が似ていると間違えてしまう。

まだまだ練習しないと！

時々、祖母も色々な国の歴史を教えるに來てくれる。けれど、答えをはっきりと教えてくれないところが意地悪だと思う。僕が点と点を結び付けて正解に辿り着けるかどうか確認しているのだろう。貴族に生まれた以上、迂闊なことは言えない。そしてわかりにくい嫌味を言われた時にやり返すため、情報を持っていないといけない。それはわかってはいるけど、祖母との会話が一番難しい。

でも祖母は、目が見えない分、人より多くの武器を持たないといけない僕を鍛えるつもりで接してくれている。そのことは理解しているものの、なかなか厳しくて泣きそうになってしまう。

祖母は帝国の出身で、元の身分は祖父より上らしい。祖父と結婚する前、戦争で帝国に吸収され

た国を自分の兄とあちこち巡っていたそうだ。

祖母が戦争の最中にも旅していたと知り、純粋に驚いた。実際、何回も危険な場面に遭遇したとも言っていた。

しかし、身分が高い祖母がフラフラと戦場にいたことに疑問を持たないわけでもない。これも謎かけなんだろうと思ひ、僕は話を聞くだけにしておいた。導き出された答えは、頭の片隅に仕舞い込んでおこう。それに僕、血なまぐさい話は苦手だし。



お茶会当日、使用人達に着飾られて、次兄の手を借りて王宮に行く。次兄と手を繋ぎ、王宮の人に案内をされ、会場となる中庭に向かう。次兄と王宮の人は僕に合わせてゆつくりと歩いてくれている。

中庭へ近づくにつれ、花の香りが強くなっている。僕は視覚の代わりに嗅覚が鋭くなっている。花の香りは好きだから、すぐに気が付いた。

「エド兄様、バラの香りがします」

「ああ、見事に咲いているようだね」

まだ、花が咲いている場所ではないらしい。王宮の人が驚き、『もう少し進んだ先にバラの花壇があります』と教えてくれた。教えてもらった場所に着いたら、次兄が感嘆の声で言った。

「やっぱり王宮の庭師の仕事は素晴らしいね」

「何色のバラがありますか？」

と、僕は次兄に聞いてみる。

「赤が多いけど、黄色や白、ピンクもあるね。他にも色々な花が咲いているよ」

「それは見応えがありますね」

記憶から、原種の可愛らしいバラや品種改良した美しいバラを思い出し、色とりどりに咲いている様子を思い浮かべる。

「リアムなら、……この風景を見たなら、お茶会そっちのりでスケッチしていただろうね」

次兄がそう言うなら、想像以上に素敵な庭園なんだろう。

「……そんなにですか。見られなくて残念です。でも香りだけでも想像はできますよ」

そんな僕達の会話を聞いて、案内をしてくれている王宮の人は、「少しここでお待ちください」と、その場から走って離れていった。

次兄が庭の風景を、僕がバラの香りを楽しんでいると、彼は急ぎ足で戻ってきた。

「どうぞこちらを」

と、次兄に二輪のバラを差し出した。

「これは？」

「庭をお褒めいただきましたお礼でございます。そこに庭師がいましたので、お願いをしてバラをもらってきました。香りが柔らかいバラを王宮よりお贈りしたいと思います」

庭師にも僕達の会話が聞こえていたらしく、快く応じてくれたらしい。
次兄は、僕のジャケットの襟のボタン穴に一輪のバラを挿してくれた。
次兄も同じようにバラを胸元へと挿す。

「優しい香りがします。ありがとうございます」

「綺麗なバラをありがとうございます」

と、彼にお礼を言った。僕はわからなかったけど、次兄はバラを切ってくれた庭師にも感謝の意を込めて軽く手を振っていたのだとか。それを見ていた他の庭師や使用人達は感激した様子だったそうだ。

「こちらこそ喜んでいただきありがとうございます。……私、サファイア公爵邸に招待状をお届けに伺った時に、玄関の間の素晴らしい絵画を見て以来、リアム様の絵画の虜になりました。今日こうしてお話ができて、本当に嬉しいです」

興奮気味の彼の声に嘘偽りは感じられなかった。

しかし、どの絵を指しているのかわからなかった。描いた絵は全て父が管理しているから。

「エド兄様、玄関の間の絵とはどれなんでしょうか？」

「ああ、リアムが描いた中で一番大きい王都の街並みの絵だよ」

「あ、あれはまだ上手く筆が使えなかった頃のもので、拙い部分もあるから、そんな目立つ場所に飾られているなんて恥ずかしいです」

僕の身体より何倍も大きいキャンバスに絵を描き始めた時に、『上の方は誰かという時に描いて

くれ』と父に言われた絵だ。脚立を使つて描くから、また落ちてしまったらと、家族に心配をかけながら描いた絵だった。

僕はきちんと約束を守り、使用人にお願ひして、交代で付けてもらいつつ描き上げた。

「いいえ、とても素晴らしかったです。街並みを切り取ったかのように精緻でありながら、どこか温もりを感じる絵でしたよ」

「そうなんだよ。リアムの描いた絵はどれも温かみがあるんだ。特に父様と母様を描いた絵は、見ていて心が温かくなるんだよ」

「それは一度見てみたいですね」

「父様に伝えておくから、見に来たらいよいよ。僕が一番好きな絵なんだから」

「はい、公爵様にお伺いの手紙を出します」

「あの、……褒めすぎです。……恥ずかしいです」

僕は熱くなった顔を隠す。二人は僕のその様子にクスクスと笑う。

もう絵は描けなくなつたけど、描いた絵は何年経っても覚えている。両親の絵は一番頑張つて描いたから、次兄にそう言ってもらえて嬉しかった。

会場に到着して、そこにいた使用人から案内された席に座る。王宮内を案内してくれた人には、次兄が名前等を聞いて、また屋敷で会おうと約束をしていた。

公爵家の僕達が、貴族子息で最後の入場となった。王宮だから夜会と一緒に、身分の低い者から